

はまたすぐに萎れてしまふものだ」とも書いた。兎も角、母親のこの勧めには断じて應じないといふ決心の下に、その翌年の春、一先づ巴里を引き上げてロンドンへ戻つて来たのであつた。——如何にも當時の彼らしく、巴里からカレーまでは、騎乗の旅であつた。

ロンドンへ着いたのは黄昏、すぐその足で母親を訪ねると、母親はこれからある邸のお茶に招かれて出掛けるといふところであつた。旅の疲れはあつたが、一緒に連れ立とうと切に勧める母親に従つて、彼は其處へ行くことにした。

お茶に招かれた邸にこの親子が辿り着くと同時に到着した一人の娘があつた。それとは一向氣付かずにゐる息子にミセス・ヴルワーは低い聲で言つた。「エドワード、御覽、何といふ美しい顔をした娘だらう！」エドワードは、言はれた方に頭を向けて見た。忽ちそれに強く打たれた。

この美しい娘は、アメリカの獨立戦争に名をあらはしたジョン・ドイル將軍の姪に當つてゐるロジーナ・ホイラーとよぶものであつた。両親は名もないもので、それも六人の子もありながら離縁した人たちであり、そのうへ、その子供たちを連れた母の住居といふものは、いつも社會主義者とか自由思想家とかの群の集會所見たいになつてゐた。そのうち才氣と意志とに富んでゐたロジーナは、

其處から遁げ出して結局伯父にあたるこの軍人の許に身を寄せることになり、その養女となつたわけであつた。

エドワードがこの娘を初めて見た折は、彼女はロンドンへ出て来て以來、四ヶ年ほど経つた時であつた。この間、彼女は數多くのサロンに入出し、そこで、夥しい若い男たちからちやほやされ通して来た。軽い小唄を作つたり、また人の癖を巧みに真似たり、サロンの隅ではいつも彼女が大勢の中心になつてゐた。

その日、彼女の眼に、巴里から歸りがけて金色の髪を縮らせた一見如何にも女くさくは見えるものの、確かに美青年でまた如何にも貴族らしく容姿の整つてゐるエドワードが、はつきりと映らない筈はなかつた。結局、この二人はお茶も終る頃、顔と顔を向き合つて詩の話を語り交すやうになつたのであつた。

……それ以來、方々のお茶で舞踏會で顔を合せることが頻繁になつて来るに従ひ、何時しか二人は影の形に添ふやうに寄り合ふ様子が人の眼を牽くやうにもなつたのであつた。

ミセス・ブルワーはさきは何気無しに自分の唇から洩れた「エドワード、御覽、何て美しい顔をした娘だらう！」との言葉の不用意だったことを、今や悔まねばならぬことになって来た。エドワードは、この娘に全く夢中になつてしまつた。結婚せねば承知せぬといふところまで行つてしまつた。然し、この娘は財産とてないし、家柄もないし、それに伯父の家に落付くまで、どんな生活をしてゐたか知れたものではない……。母親としては、名譽あるリットン家から考へて、到底こんな娘と結婚など許されたものではなかつた。それに、エドワード自身だとして、この母親がリットン家の財産を管理してゐる限り、餘計なお金は一文だつて自由になりはしない。それを考へたら、母親の意に反してまでこんな娘と結婚することもし得ないに違ひない……。

が、八月の末、若い二人が森の中で優しい言葉を交しあつてから後、エドワードはロジーナに最初の戀文を送つた。——「私は貴女に觸つた、私は貴女の手をこの手の中に感じた。もう私にはこの世には貴女以外、何にも存在しなかつたやうに思はれる」かういふ言葉もある。「私は貴女に、私

は貴女を愛しますと言ひました。私は今それを繰返します。貴女御自身の心持は如何なのでせう、私が待ち得るやうなことを私に仰しやつて下さい」かういふ言葉もある。

これ等の言葉に對するロジーナの言葉はと言へば、むしろ極めて「常識的」なものでさへあつた。彼女は言ひ送つた。——若し彼女が彼の願ひを容れた結果、彼としてその自由な文學的才能を充分伸ばすの機を失はしめるやうなことがあつた場合には、彼及び彼の母親は屹度彼女を憎むに違ひがなく、それを思へば無理からぬことであると。エドワードはこの手紙を手にするや、直ぐと書き送つた。「貴女を憎むだつて！ロジーナ。今私の眼は涙で一杯です。この心臓の打つのが聴えます。私は貴女の手で書かれた手紙に接吻しようとしてペンを擱きました。この強い愛のしるしが、どうして憎みとなり得るでせう！……貴女の寛大さに、魂の底まで動かされてゐる私です、生涯の如何なる場合に於いても、またこの手紙の結果がどうならうとも、私は最も眞實なる貴女の友として終始するものであることを信じて下さい……」

息子からの結婚の願ひを書き綴つて来た手紙を手にしたミセス・ブルワーは、世にもつれない返事を書き送らねばならなかつた。母親から遁げ出した娘。それからどうした生活を送つてゐるのかも知れない娘。社交界へ顔を出したがつて許りある娘。その妹が逝くなつたといふのに喪服も身に纏はなかつた冷淡な娘。……かうした娘を、どうしてリットンの名門に嫁として迎へることができよう。——若しどうしてもこの娘と結婚したいといふのなら、母としては止むを得ず生活費の扶助をやめにする許りです、——かうも、ミセス・ブルワーはエドワードに書き送つたのであつた。

然しながら、ミセス・ブルワーからかうした数々の誹謗の言葉を受けた娘——ロジーナ自身にも、言ひ分はうんとあつた。第一、エドワードを母親が世にも秀れた立派な息子だと考へてゐることからして、可笑しい。なるほど、彼は美貌でもあり、才稟もあり、先々いい作家になりさうでもある。然し、確かなことは誰が言へる？ 話が愉快で、雅びやかで、いい育ちだといふことは間違ひない。然し、彼女の周囲にはこの種の若者が二十にも越えるほどゐるではないか？ 家柄々々といふけれど、彼女は現に従男爵ジョン・ドイル將軍の歴とした姪ではないか？ それは勿論エドワードを愛しないのではない。然し、その程度になら、他の人でも愛せぬわけではない……。

その間にはさまつたエドワードの心地はと言へば、固よりロジーナには牽かれるものの、母親の言葉のあながち無理と許りは言へないもののあることも感じぬわけには行かなかつた。逡巡と懊惱の日が続いた。一度は娘と別れることさへ決意した。然し、その折、彼の上梓した『フォー克蘭ド』と題したウエルテル張りの小説が豫想外に人気を呼んで、思ひ掛けない巨額の稿料さへ彼の手に轉じて來、彼の生活の獨立も最早空想ではなくなつた。一方この成功を見て母親も最後まで息子に反對する力を失くしたかに見えた。

とどのつまり、ミセス・ブルワーは、その嫁とは永久に顔を合はせぬこと、母親からの金銭の扶助は當にせぬことを條件として、エドワードの結婚に同意することとなつたのである。

一八二七年の八月の末、ロンドンでこの若い二人の結婚式は擧げられた。その式は、——何となく寂しいものであつた。エドワードの心には母親が嘗つて言つた『若しその女と結婚したらお前は一年のうちにイギリス中で一番不幸な人になります』といふ言葉が、不吉な豫言のやうに胸を左右した。ロジーナはロジーナで、この結婚は自分からすゝんで求めたのではなかつたこと、しかも、この新らしい生活の爲めに自分の若さ、美しさが犠牲となつてしまふのだといふことを、今更ら

く思ひ浮べた。二人はそれぞれ愛してはゐる。然し漠とした將來が二人を不安にしたのであつた。

オクスフォードの近郊に借りた若い二人の住居は随分と宏壯なものであつた。母親が益々頑固に出て來れば来るほど、エドワードは、妻の爲めに家のなかを立派に飾り立てることにした。多くの召使も雇つた。さうしたものに圍まれたロジーナの美しさとエドワードの若さとは、數多い訪問者を讚嘆せしめずにはおかなかつたほどだつた。

新婚の一年は芽出たく過ぎた。エドワードは、殆んど何一つ妻に責めるところとはなかつた。母親の豫言は見事外れたかの觀があつた。ロジーナも夫を心から愛した、夫以外の何人をも愛さうといふやうなことはなかつた。たゞ一つの彼女の悩みと言つたら、夫が如何にも忙しいと言ふことだつた。彼女は、文學者といふものが、こんなのにべつ働かねばならぬものだとは想像してゐなかつた。彼女は初めて文學者の仕事と言ふものは、空想に頼り現實の事物を閉却して、無意識だが随分と残忍な利己主義を要求するものだといふことを知つた。それに若い娘の身でロンドンにあつて

多くの人々と談笑して月日を過してゐた彼女にとつては、この田舎での寂しい月日は辛いには相違なかつた。然し彼女は二人の生活の爲めにも、鮮くも數年間はかうした田舎暮らしの必要なことを悟つてゐた。そして、夫が殆んど一日中部屋に引籠んでゐるのさへ、我慢して不平も口にしなかつた。そのうちに（結婚後一年経つて）女の子が生れた。ロジーナは、自分でそれを育てたいと言つたけれども、赤ん坊に家のなかで泣きわめかれては仕事ができなまいといふエドワードの意見で、里子に遣ふことになつた。ロジーナの心の悲しみは容易に薄らかなかつた。彼女は家に飼つた何匹かの犬を相手に、その悲しみを紛れさせるのが唯一の慰めとなつた。彼女には、それほどまでにしてその仕事で、エドワードの言ふやうに神聖なものだとは思へなかつた。彼女の持つて生れ付いた皮肉味——嘗てロンドンで彼女の「人氣」の原因ともなつたその皮肉さが、いつかその唯一の觀察の對象である自分の夫のうへに向けられるやうになつて來たのであつた。

かうしたなかで書かれた小説『ペレム』は、また人氣に投じた。二人の生活を樂にし得る金額もはいつて來た。然し、エドワードは妻一人を田舎へ置いたまゝ、二三日泊りでロンドンへ出掛けて行くことがあつた。舞踏會に出たり、晚餐會に出たりして、何れ小説で描くべき世間を觀察しよう

といふのであつた。ロジーナは『夫は妾の許しを得て出掛けたのだ』と自らを慰める言葉を囁いても見た。然し野原の真中の廣い建物のなかに一人ぼつねんと、友としては犬以外にない境涯にあつては、思ふまいとしてもあの二十人もの青年にとりまかれ、一語一語に皆を笑はした當時のことを思ひ浮べずにはゐられなかつたのである。

ミセス・ブルワールの新夫婦に對する依估地な態度は依然變らなかつた。息子の數々の手紙にさへ返事を書かなかつた。孫が生れたと言つて遣つたのに對してさへ、一ペニイのお祝ひを送らうともしないのだつた。

然し前回の『ペレム』が世の好評を博したのを知つて、言はゞ一種の虚榮心から來た満足からか、彼女はエドワードに相當多額の年金を送ることとしようと言つて來た。但し、嫁は依然永久に逢はぬといふことを附言してゐるのだつた。

この申出を受取つたエドワードは、世にも威嚴ある態度できつぱりと斷つた。『……私の妻につい

てお母さんの仰しやることはつまり私にとつて二重の恥かしめに當ります。結婚した二人の利害といふものは全く一つです。……ロジーナについてのお母さんの最初の悪印象の幾つかの理由は、今や間違つたことが證明されました。あなたは、私が結婚したら一年内に人間中で一番不幸な者になるとお言ひでしたが、この御心配は實現されなかつたわけです。すくなくとも私が不幸であるにしろ、それは私の妻の愛情とか彼女の行爲とかに關しての失望から來てゐるものではありません』
この手紙を読んだ母親は、この手紙の終の句に氣をとめた。これは、息子が幸福にはゐないといふことを半ば自白した文句ではなからうか？ 一つは好奇心から、一つは憐れみの心から、ある日、母親はその嫁を訪ねて見たのである。然し結果は全然失敗だつた。二年間も隔てられてゐたロジーナが、姑が來たといふので玄關まで飛び出してその胸に取りすがるといふやうなことがどうして出來よう。然し、それが不満だつた母親はぶつ／＼言ひながら歸つて行つたのである。
田舎の一軒家にひとり置かれ、夫の身内には忌み嫌はれ、加へてその夫からはいつも見捨てられてゐる身の憐れな境涯をロジーナは今更しみじみと感じないわけには行かなかつた。

小説『ペレム』の成功は、エドワードを一躍人気作者たらしめた。彼は社交に饗應に——そして先々は政治界に顔を出すことにも、ひどく關心するやうになつて來た。結局ウッドコットの田舎の住居を疊むこととして、二人はロンドンも華麗できこえた街の一角に新居を營むことになつたのであつた。宏壯な建物、そのなかを金目を惜まずに飾り立てた。殊に食堂はエドワードの好みで、かのボンペイの様式に裝飾することゝなつた。

かうしてこゝに綺羅びやかな生活ははじまつた。名ある文學者、政治家がそのなかで見られることゝなつた。トマス・ムアが來た、若いデイスレーリが來た、ワシントン・アーヴィングが來た。さうした人々を受けるエドワードの手馴れた應接振り、靜かに優婉なその容姿はいい好みの着付けと相俟つて、外目には世にも幸福さうな主人ぶりであつた。

ロジャーナはと言ふと、この絢爛な住居の真中に居り、この主人の陰身となつて立働いてはるものの、心はその生活に伴つてはるなかつた。第一そこに營まれてゐるものは、家庭の生活ではな

つた。エドワードは何日でも朝食はその書齋のなかに攝つた。デインナーも來客があるときだけ家で喰べるのであつた。それに、家に來る文學者の客は、彼女には、一樣に氣取り屋さんだつた。所謂洒落者の使ふ流行語なるものも様子振り勿體振つたもので、彼女には不愉快なものだつた。彼女は善良でさばさばしたアイランド人やフランス人やの間に育つて來たのだ。形式とか深みとかを無理に探さうなことはせず、考へたままをばつぱつと言つてしまふのが好きな性だつたのだ。『生活に對する彼女の態度は不敬虔だ。彼女は子供の時から、人の氣を害ふやうなことを樂しむとして來たのだ』——かう、夫は、ロジャーナについて言つてゐる。淡白だと妻が呼んでゐるものは夫は無作法だと呼んでゐた。デインナーの後などで夫が威勢高になつて妻の擧作やら話し振りやらを批評するのをききながら、彼女は數年まへのことを思ひ出さずにはゐられなかつた。その時エドワードは、彼女の機智の巧みさを速かさを百度も賞めたたへたのではなかつたか？ それを今は、無理にも變へさせやうとしてゐるのだ。彼女の方では無理に性質を變へるといふやうなペダンチズムは忍び得るところではなかつた。従つて彼女は依然平氣で好きな様な話し振りを續けて行つた。それがトマス・ムアやデイスレーリやの氣を悪くするやうだつたら、それはその人達にお氣の毒と

いふまでのことだ……。

更に二人の間を深く分つ一つの點は、エドワードがその家系その家族といふものに對して一種尊敬の念を抱いてゐるのに、ロジナの方は全く無頓着だといふことであつた。エドワードの家系は父方のリットン家なり母方のブルワー家なり、昔から引續いて世の尊敬を集めた名門名家であつた。これに反し、ロジナの方は、兄弟親子それ／＼喧嘩し合つて、他人のまへでも憚らずに悪口を吐くやうな家風であつた。エドワードが、そつと大切に拜め置くやうな人でも、ロジナは（特別の悪意はなく）遠慮なく棚卸しをした。彼女にとつては、この家系の誇りなどは、滑稽な虚榮心に他ならぬものであつた。

それに、日に日に職業的な文學者の型に陥ちて行くのも、妻にとつては笑止なことであつた。夫は、つまらない雑誌に出た鳥渡した悪口なぞにも心を痛め、その爲め、時とすると數日間も打ち萎れてゐることがあつた。妻はそんな場合、己れ自身の不幸と較べてひそかに苦笑ひをした。平素あ

れほど高慢な態度を採つてゐながら、こんな些細なことで憎げる夫のうへを、一層皮肉な眼で見るのであつた。夫が、その小説のなかの人物のやうに、如何にも男らしい、そして優雅な感情を言葉で言ひ現はしてもするやうな場合は、妻は、心中で輕蔑しながらかう獨語するのだつた。——「作者の偽善！」と。彼女は、彼が頑で我利々々で虚榮が強くて、愛よりも成功に夢中なることを知つてゐた——。

夫はまた、作者として毎日々々夫婦生活の同じ場面をのみ見ることから、違つた色彩のなかにそれを眺めやうとした。かうして彼は妻を贈り物のなかに埋めたのだつた。さては、諸々の變つた人物を連れて來ては妻に逢はせるのだつた。生活費は膨脹して年に三千磅も必要とした。勢ひ彼は働かなければならなかつた。毎年長篇の小説を一つ、短篇を幾つか、それといろんな雑誌に無数の記事を書かねばならなかつた。この絶え間のない勞作は、彼を極度まで神經質にし、苛々させることとなつたのは無理はない。さうなると、仕事は益々進みが鈍くなつて來、神經は止め度なく昂ぶつて來ることとなる。かうなると、妻が常に不機嫌の的となるのだ。尤も吐り付けた後で彼は直ぐに後悔した。——が、もう遅かつた。

彼はまた妻が己れの仕事に興味を持たぬことに不服だつた。彼は常に文學者の家庭をこのやうに想像してゐた。——朝のうちに何頁かすらと書き認める、それを持つて部屋にゐる妻(妻はそれを聴かうと先刻から待つてゐるのだ)の許に出掛けて行く、それを聴いてゐる妻は、夫と同じ高い熱心に捉へられる……。然しながら、一日中捨てられてゐるロジャーは、神々しい材料について語り合ふ興味からも、その小説の女主人公の心理について嬉々と論じ合ふ熱心からも、遠く離れてゐるのだつた。彼女は唯現實過ぎるほど現實の悲しみやら不平やらに身をさいなまれてゐるのだつた。姑の意地悪さや夫の虚榮心やらに考が絶えずとられてゐるのだつた。——

もう彼女は二人の子の親ではあつたが、その子供も彼女には無關心であつたと言つてよかつた。それも夫が此等の子供を手許から遠ざけさせた爲めに自然とこれ等のことに手出しするのにも厭になつたのである。唯犬だけが唯一の相手だつた。また犬だけが彼女を愛するやうに見えた。彼女が見えたときのその犬の樂しげな吠え方は！ 彼女は何處へでもその犬を連れて行つた。犬の名刺を作つて、自分の名刺と一緒に訪ねた家へ置いて來さへもした。この犬に對する度外れの愛こそは、取りも直さず、彼女にとつて人間の悲しみを表はしたものに外ならなかつた。

その頃エドワードは、時々ロンドンの俗塵を脱れて閑靜な田舎で孤獨な思索に耽る必要があるとて、遠くに一軒の家を買ひ入れ、そこで幾週間かを一人で過すことがあつた。然し、この家にエドワードはある女性を置いてゐるらしい、その出入の姿を親しく見た、とロジャーに告げ口をする者もあつた。これ以來、一層彼女は、エドワードがその仕事に對する氣高き感情を、政治家として作家としての義務を滔々と喋り出すやうな時、心中は侮蔑の念で一杯になるのであつた。

一八三三年(エドワードは恰度三十歳になつてゐた)二人の生活は堪へられぬものとなつて來た。國會議員としてまた小説家としての彼の二重の仕事が彼を壓倒した許りではなく、かうして家の内部の空氣さへ一瞬も彼を樂しませ休ませることはなかつた。

結局彼は妻と二人して、 스위スからイタリヤへかけて旅行に出ようと決心した。妻も同意した。ロンドンの生活から離れ、日常の煩鎖な連鎖から離れて、二人だけで山麗しく水清きこれ等の土地を暫らく香氣に歩いたら、今までの地獄のやうな生活も屹度救はれるに相違あるまい、——これが、二人とも心の願ひであつたのである。

ロジーナは、——リットン卿夫人はわけても今度の大陸の旅行に望みを掛けるところが大きかつた。彼女は、その夫を昔と較べては愛することが減つたとは言へ、夫以外の誰を愛してゐるわけはなし、従つて二人の家庭が持ち直すことは何よりも心から望むところであつた。それにロンドンを去るに當つて、夫人が後髪を牽かるるものと云つては、——犬のフェリイ以外何物もなかつた。然し折角のこの旅も、二人の仲を近寄せるどころか、反對にその溝渠を益々深くするに役立つたに過ぎぬものとなつてしまつた。旅行の難儀が喧嘩の種ともなつた。イタリアの美しい風景も二人の眼に同じやうには映らず、二人の趣味がこれほど違ふかと認め合ふやうな場合のみ多かつた。些細のことが言ひ合ひの因になつた。結局リットン卿は藝術や歴史やの研究に没頭してこの不愉快さを忘れようとし、夫人は、終日ホテルにあつて人生を呪ふといふやうな日のみ續いたのだつた。夫人は手紙にかう書いた——。

『イタリアの旅は三つの特色を持つてゐます。ペストと傳染病と饑餓とです。ペスト——蠅。傳染

病——惡臭。饑餓——食事。それなのにエドワードは、——自分の家では何一つ満足することもないエドワードは、この厭らしいなかで堪能して、益々肥る計りなのです。まつたく小間使の言ふ通りですよ、——「ミスター・ブルワーは天の邪鬼さんで悪い寢臺や悪い食事が好きなのですわ！」けど妾は、リモナードと愁嘆とのこの國では身が細るばかりですわ。あ、こんな國を美しいとか言つた詩人といふものは皆嘘つきです！……」

ヴェネチアは蠅ばかり。フェレラも同様。ロジーナはそれに刺されて顔中を腫れあがらせながら朝飯を喰べてゐる間、エドワードは詩人タツソの遺跡の石部屋に夢中になつてはいりこんでゐた。糸杉や橄欖樹や柘榴やの茂つてゐるフィレンツェは鳥渡の間は彼女を樂しました。——が、それとても『イギリスのどんな小さな町だつてこの二十倍も美しい。……我々の窓はアルノ河に面してゐますが、この綺麗な名の河も汚ならしい、狭い、泥で濁つた、ごたごた芥塵の流れてゐる小河に過ぎません。そこで半分裸體の野蠻な男達が一日ぼちやくと泥を動かしてゐるのです。ウエストミンスター橋邊のテムス河は、百倍もこれより綺麗ですわ』——であつた。ロマは尙更つまらなかつた。『もうペンを探る氣もせぬほどこのロマには愛憎がつかまりました。妾が見たうちで、最も汚ない最

も野蠻な最も厭らしい場所はこゝです。……その郊外もロマ同様、醜惡です。……

やがて二人はナポリへ來た。ケンブリッジ大學在學以來古物に興味を有してゐたエドワードは、かねてからラテン時代の材料で小説を書いて見たがつてゐた。殊にミラノのブレラ美術館で見た『ボンペイ最後の日』と題した一枚の油繪は、彼の心をいたく捉へてゐた。今親しくボンペイの廢都を訪ねた彼は、この大災厄を背景としてロマンチックな葛藤を描いて見たい強い欲望に燃やされた。彼は、早々にその仕事に取掛つた。

さうなるとエドワードは朝から晩までボンペイの文獻をひもといて飽きなかつた。人が話し掛けるのも嫌つた。部屋の中に人がはいり込むと、絶望の呻き聲を洩した。かうして、ロジーナは、ロンドンや田舎やでと同じやうにホテルの一室に何日間も全く獨りぼつちで捨て置かれることとなつたのである――。

ところが、ある時、二人が招かれて出掛けて行つたナポリのある家庭で、ロジーナは一人優雅な

貴公子に逢つたのだつた。それはナポリの公爵だつた。公爵は、彼女の美しさを認めた、そして、そのアイランド風な眼尖、その皮膚の色合ひ、その機智を賞めた、へたのだつた。(恰度七年まへにエドワードが書き送つたやうに!) 彼女は、さうした言葉に悪い氣持はせず耳傾けた。彼女は自語した。――妾はまだ美しいのだつた。まだ男の眼を悦ばせることもできるのだつた。オレンジの花の咲くなかに歩かせてほればれと見る人もまだあるのだつた……。

エドワードが熱狂してボンペイを『復興』しつゝある間に、ロジーナは、公爵と一緒にナポリの町を訪ねはじめた。たちまちナポリはすばらしい町となつた。彼女は手紙に書いてゐる。――『ナポリこそは我々が失望しなかつた唯一のイタリアの町ですの!』ナポリのホテルは快適だつた。蠅やら饑餓やらはもう問題ではなかつた。ナポリの灣は美しかつたし、ナポリの太陽はめざましかつた。公爵はあらゆる讚詞あらゆるお世辭を彼女に惜まなかつた。あ、今まで彼女の性質のうへにその舉措のうへに浴びせかけられてゐた非難と何といふコントラストをなしてゐることであらう?

何日かの間、エドワード、——リットン卿は、己れの眼の下で行はれてゐることを何も見なかつた。彼は實に耶蘇紀元前七十九年の世界に生きてゐたのだつた。それに、彼は數年來、全く妻には無關心な習慣がついてゐるのだつた。

然し、とう／＼ある日、彼は妻のこの行跡（しかし、それはブラトニックのものだつた）を認めた。彼の憤りはすさまじかつた。彼は妻にその男を愛してゐるかどうかを尋ねた。妻は、それを愛してゐること、夫に對して抱いてゐた愛情は全く消えてしまつたこと、夫は自分にとつて信仰もない心もない徳もない、高慢で無感覺な男としか映つてゐないことを答へたのだつた。これを聞いたリットン卿の心には瞋恚の心が燃え上つた。「ボンベイ最後の日」は忘れられてしまつた。彼はただロジーナをナポリから引離すこと、そして、イギリスへ向けて即刻出發すること、——そのみが問題であつた。

歸り路は、たゞ長い諍ひであつた。リットン卿は自分の行跡は棚に上げて、妻の不貞のみ責めた。然し彼女は、六週間も自分を打捨て、ボンベイに入り浸りになつてゐながら、今になつて自分に兎や角言ふ男の身勝手に淺ましく感じるだけであつた。

イギリスに歸り着いてからも、二人の間の和解は付かなかつた。夫は、妻の口からはつきりと、依然自分を愛してゐること、公爵を嘗て愛したこともないことを言はしめやうとしたが、妻はにべなくこれを拒んでしまつた。結局暫らくの間二人が別居してゐる方が宜しからうといふことに話は落ちる外はなかつた。

別居は二人の感情を和げたことは事實であつた。二人は孰れも近い不和を忘れて遠いその日の思ひ出を——カロリン・ラムの森のなかで交し合つた最初のキスの楽しい思ひ出を泛べるのであつた。夫は妻にかうも書き送つた。——「……わが愛するローズよ、自分はお前を深くまた眞に愛してゐることを信じて呉れ。たゞこの世の雑多なことが自分を疲れし、自分を苛立たせ、その結果、つまらぬ一言一句が自分を數日間も惱ませるといふやうなことにさせてゐたのだ。それをよく理解して呉れ」エドワードの母親、ミセス・ブルワー・リットンも今は過去の自分の振舞が今日の二人の不幸を生むだ原因の一つであつたことを後悔して、息子に手紙を送つて、二人の孫の爲めにも夫婦

が仲直りすることを勧めるやうになつた。……二人の間に今一度新しい結婚をするやうに試みなさい。過去を一切忘却のなかに押し遣つて、より善き未来を確保するやうにおつとめなさい』
かうしてエドワードは、妻に手紙を送り、今後彼女の住む田舎にちよいと訪問を爲すべきことを言ひ送つたのだつた。この手紙を手にしたロジャーは、いそいそとして、長い旅から歸つて来る夫を迎へるやうな氣持で一週間もまへからその訪問を待ち受ける爲めに、飾りつけなどをするのであつた。殊に、その頃『ボンベイ最後の日』は出版されて大變な人氣を呼んでゐる時でもあつた。『妾はまつたく感激して讀みました、この小説には彼の他の作品よりも遙かに天才が示されてゐるのを妾は感じました。誰でも讀みはじめたら中途で頁を閉ぢることができぬでせう』——かう彼女は、友の一人に手紙で書いたのもこの折のことだつた。二人が逢ふことにするには最も適はしい時でもあつた。

然しながら、折角のこの面會も、五分と経たぬうちに二人の感情をまたしてもこじらせることとなつてしまつた。彼女は彼の氣に障るやうな話し振りをすぐ口にした。彼はつとめて不快な感情を表に現はすまいとしたが、矢張り堪へ切れずに憤り出してしまつた。彼女はエドワードがある女とロンドンで暮してゐるのを知つて、そのことを嫉妬の燃える感情で發き立てた。エドワードはエドワードで、ナボリのことを持ち出した。かうして、僅かの時間の面會から惹き起された双方の苦い感情は、それを鎮める爲めに數時間も要するといふやうな始末であつた。

○
當時のイギリスの法律では、離縁といふことは許されなかつた。たゞ夫婦別居の制度が認められてゐるだけだつた。エドワードは、先づそのことを考へた。間もなく、その決心は以下のやうな手紙で妻の許に言ひ送られた。——『僕の決心は最早 離し得ない。我々は別れることが必要だ。おまへももう僕がおまへを『田舎の牢屋』へ閉ぢこめて置くなどとは言ふまい。おまへは好きな何處へでも行つて住むがいい。……おまへは僕に對して何等の愛情も持たず、僕がおまへに對して持ち得た一切の愛情を根こそぎにしてしまつたのだ。……』それから、年金として四百磅、更に子供たちの爲めに百磅を送るべき旨が認めてあつた。

この手紙を手にしたロジャーは、今更に孤獨と絶望とのなかにその身を見出したわけであつた。

彼女は忘れるが爲めに飲むことさへも敢へてするやうになつた。かうした彼女の胸に絶えず浮ぶのはあのナボリの空と海とであつた。「あ、ナポリ、貴いナポリ！ おまへこそは妾に若さを感じさせて呉れた唯一の場所だつた！」——と彼女は日記に書いた。それにしても、このナボリの出来事（それも罪のない！）の爲めに、それ以來、何等後ろ目たしことをしてゐない彼女は今見るやうな惨めな償ひを負はされてゐるのだ。それに、濕氣の多い田舎の住居は、彼女を病氣にしてゐた。彼女は絶えず咳をしてゐた。めつきりと老けて來たことが感ぜられた。かうなつて見ると、今更に懐かしいのは人の情だつた。然し、その情も、夫をのぞいて何處にそれを求め得る人があらう！ 彼女は夫にかうも書き送つた。——「妾があなたにお願ひしたいと思つたのは、この病氣で死にかつてゐる年老つた杉犬を許して下さるといふことでした、もう一度許さうと試みて下さることでした。……それも、あなたは安々とお遣りになれる筈です。何故つて、この慘酷な病氣は齒を落させ爪を落させ、恰度ロマの老いぼれ犬のやうに衰へ切つて抵抗など出來なくなつてゐるからです。あなたは、悪いことをしたのでその犬を殺さうとしたある男の寓話を御存知ですね。その男は犬を殺さうとした刹那、ふと思ひ直して止めることにしました。そして申しました。——い、や、貴様は

昔はかはいい犬だつたんだ。それを想ひ出すと、おまへを虐めることは出來んよ……と。」そのあとに彼女は書き加へて、若し自分が死んだやうな場合には、愛犬のフエリイをどうぞ大切にしてください、その犬も結局死ぬやうな場合には、その骨を自分と同じ墓へ埋めてほしいことをくれぐれも頼んだ。

數日後、夫婦別居届は署名さるることとなつた。

この夫婦別居届で、いざいざの一切は終つて呉れることと、エドワードは思つてゐた。が、事實はさうは行かなかつた。

ロジーナは孤りて静穏と忘却とのなかに暮せるやうな女ではなかつた。友だちもなかつた。それに氣性は激しかつた。到底ひとり、家計を整理しながら遣つて行くといふやうなことは出來もしなかつた。年金を浪費してしまつては、借金を作つて、その尻はエドワードの方に持つて來た。最初のうちは優しい言葉で、最後には脅しの言葉で。益々酒を飲み覺えるやうにもなつた。彼女に逢

ひに来る人でもあり、皆エドワードの間隙とした。そして悪口雑言の限りを浴びせかけた。そして、エドワードあての手紙をクラブや議會やに送り、その封筒のうへには墨黒々と夫の不徳や不行跡を書き認めるやうなことをした。

エドワードは今や作家としても政治家としても隆々たる名聲を馳するの地位にあつた。リットン卿の名は、巷を馳する子供も知つてゐた。然し、その赫々たる生活も、この憎しみの爲めにはどうして曇らないでゐるやう。彼は何處にどうロジナが隠れてゐて不意に目のまへに飛び出し取返しのかかぬスカンダルを演じ出さぬとも知れなかつたので、公開の場所に出るのを憚らねばならぬやうなことにさへなつて來た。まつたくロジナは、エドワードから回して呉れる年金を使つてはいくつかの不徳新聞の記者を買収し、あること無いこと彼について書かせたりするやうのことまであつた。彼はつくづくと嘆息を洩した。——「二人の人間が戀人として嬉々と死につくのは至つて易い、然し夫婦として一緒に過ごすことは實に難かしい！」

一八五八年、わがリットン卿は殖民大臣の榮譽ある官職を占むること、なつた。彼の幼時からの親友デイスレーリが首相の印綬を帯びたが爲めであつた。この爲めに彼は選舉區に赴いて報告せね

ばならぬ必要があつた。このことを知つたリットン卿夫人は、秘かに會場へ出掛けて、夫が演壇に上るのを待ち構へてゐた。リットン卿の姿が演壇に現はれるや、彼女はそのまま進み寄つて大聲を擧げた。——「こんな人間を殖民大臣にするなんて、國の恥です！」。リットン卿は口をつぐんで演壇を去つてしまつた。そのあとに立つた彼女は、面白がる聽衆を相手にわめき散らした。——「イギリス國民はこんな人間を殖民地の頭としやうとするのか？ この男は妾の子供たちを殺した許りでなく、妾を暗殺しやうとしたのです。妾が今着てゐるこの着物だつて、妾の知合ひのお恵みで出來たのです……」

この事があつたのち、ロジナは精神病患者の取扱ひを受けて暫らく監禁の憂き目に逢ふこととなつた。新聞紙は新聞紙で盛んに書き立てた。公人としてのリットン卿の立場も一時危まれるほどだつた。然しいい具合にその息子が母親を連れてフランスに渡り、そこで専ら看護に努めることとなつた。どうやら母親の心も落付いて來るやうになつた……。

リットン卿夫人はイギリスの地でその日その日を送ることとなり、結局八十歳まで長生きしたの

だつた。彼女は暇さへあると、その多くもない隣人などを相手に盡くすることない夫の『犯罪』談をするのを常としてゐた。時々はまだ夫が彼女を愛してゐた頃、彼女に書き送つた手紙を読み返すやうなこともあつた。さうした手紙のなかに以下の如きものがあつたことをわが讀者は記憶してゐられるであらう。——「貴女を憎むだつて！ ロジーナ。今私の眼は涙で一杯です。この心臓の打つのが聞えます。私は貴女の手で書かれた手紙に接吻しやうとしてペンを擱きました。この強い愛のしるしが、どうして憎みとなり得るでせう！……貴女の寛大さに魂の底まで動かされてゐる私です、生涯の如何なる場合に於いてもまたこの手紙の結果がどうならうとも、私は最も眞實な貴女の友として終始するものであることを信じて下さい」 (一九二八年一月下旬ストックホルムにて)

(筆者註——本稿はフランスの今日の文壇に於いてイギリス文學通として聲名あるアンドレ・モーロア André Maurois が同名の文章『兩大陸評論』客年十二月十五日發行號)を適宜取捨鹽梅して書き上げたものです。なほ二三年まへに出た同氏の『アリエル』Ariel は書き振りの『ボンベイ最後の日』に似て薄倖な詩人シェリーの一生を小説風にしたもので、フランスでは随分評判になつた本です。餘計の事ながら鳥渡書き添へます。)

巴里を去りて巴里を語る 終

巴里を語る

昭和四年十月十五日印刷
昭和四年十月二十日發行

巴里を語る
定價八拾錢

著者
檢印

印刷者

竹内喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

著者

柳澤健

發行者

島中雄作
東京市麹町區丸ノ内三丁目二ノ一

發行所

東京市麹町區丸ノ内三丁目
丸ノ内ビルディング五八八區

中央公論社
振替口座東京三三四番
電話丸ノ内〇二〇六番二七五七番

社會式株刷印清日 所刷印

テニリアルル著 秦豊吉譯 西部戦線異状な

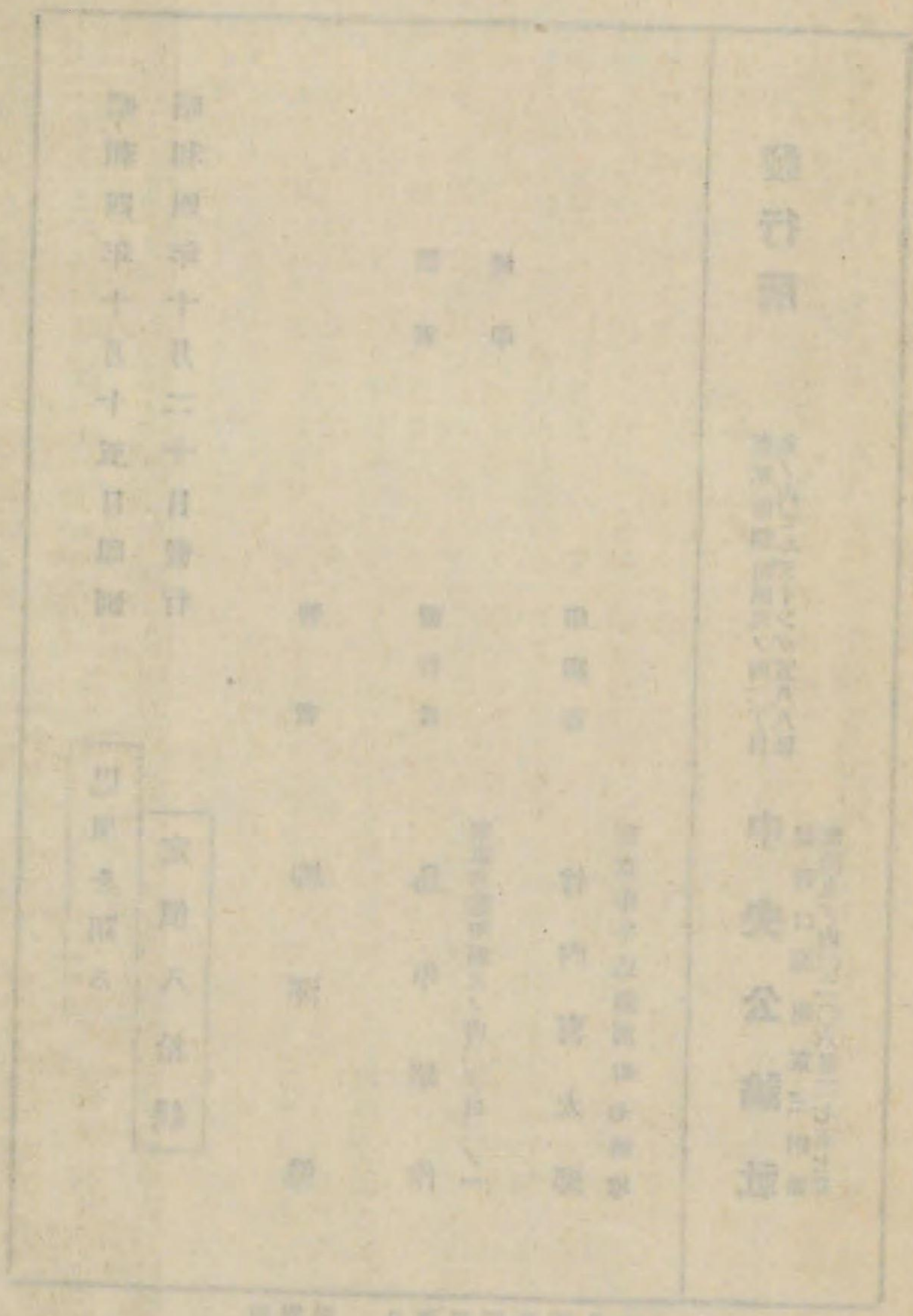
人を感動させるのが藝術の職分であるなら、これ程偉大な藝術は今の世に又とない。著者ルマルクは十九歳の學生生活を中途にしてあの大戦に驅り出され最前線に配置された。櫛風沐雨の幾歲月、何度も死線を潜つて不思議に生きのびたのだが、彼の心に受けた傷手は餘りに重かつた。戦すんで母の膝下に歸つてから今日までの十年間、彼は一日として戦争の苦悶に責め抜かれぬ日がなかつたさうだ、其幽霊から逃れんために此の本を書いたといふ——文士でない彼にうまい文章が書けるわけはない、尊い事實がものを言つて全然無名の一兵卒にこの驚歎すべき著述を完成せしめたのだ——試みに思へ、軍鋏で胸を三つに裂かれる佛蘭西兵も首を失つて血を噴き乍ら走る獨逸兵も共に人間ではないか、長距離砲と毒瓦斯の地獄の中に彼等が阿鼻叫喚して荒れ狂ふ光景は到底正視するに耐えない——讀んで泣かぬものは人でない、涙と憤激なしに讀み了せる人はない答だ……。

敵が静かになつた、味方も鳴りをひそめた、五年の月のあけくれを陰り通した砲聲がハタとやんで氣味悪い夕映えが荒涼の戦野を照らす。軍司令部の公報がはいつた。「西部戦線異状なし」……。

其時はあたりいぢめん死人の山で誰一人生き残つて此の報告を聴く者もない。何といふ静かな幕切れ……。讀者は思はず息をついて、何とも知れぬ深い禱りに誘はれるであらう。全篇を通じてすべての描寫は稀れに見る的確簡潔、息づまるやうな迫力を有ち、然かも其間、河を泳いでフランスの女と構曳する一場の愛すべき牧歌と、朴訥な青年兵士の詩情を所在に點綴せしめてゐるところなど、偽はりなき筆致は飽くまで鮮明印象的である。

獨逸では八十萬部を賣り盡し英國で二十萬佛國で三十萬米國で二十二萬部賣られた、一月發行八月末現在今や全世界は此の書の話で持ち切り、到る處で物議の種となつてゐる。

四六判四百頁 定價壹圓五拾錢 送料十二錢
中央公論社發行
振替口座東京三四番



踊る地平線 □ 谷 讓次著

近代的感覺で

描出された絢

爛たる異國風

景の密畫です

踊る地平線は

世界的教養を

もたらず唯一

の教科書です

木村莊八畫伯裝幀 定價 貳圓五拾錢
四六版上製八百頁 郵送料 拾八錢

モダンナンセンスの大家として著者は既に定評ある人。その
輕妙奇抜、その才機縱横、端倪すべからざる機智と該博なる智
識とは、寔に他の追隨を許さない。本書は過去一年間に亘つて
「中央公論」誌上に連載せられ、十萬の讀者を魅了し盡したる
「新世界巡禮」全篇の集録にして、讀者の切なる希望を入れて
此處に發刊されたもの。その内容に至つては今更喁々を要せ
ざるべく、一ト度本書を手には必ずや巻をおくの時を忘れる
であらう。裝幀また木村畫伯の手になり、木版手刷の全美を盡
したるものにして、是れ又必ずや諸士を滿喫せしめるであらう。

中央公論社發行

中間物選集

高と車動自！フイランダーダモのスンダとマネキとズヤジ
だん富に智機能的覺感！樂響交會都のツーボスと築建層
ニカリメアとムズシキルマてしそ！スンセンナンダーダモ
！れ上召をルテカカ的代近のこ！曲進行頭街のムズ
(行發社論公央中)

巴里を語る	柳澤健著
近代明色	新居格著
山へ入る日	石川欣一著
都會の論理	林房雄著
文壇縱横論	大宅壯一著
月寒の女	下村千秋著
都會の點描派	淺原六朗著
或る斷層	ささきふさ著
雜・エトセトラ	高田保著
場末風流	小島政二郎著

錢八料送。錢拾八册各價定。頁十數百三版六四

新版大東京案内

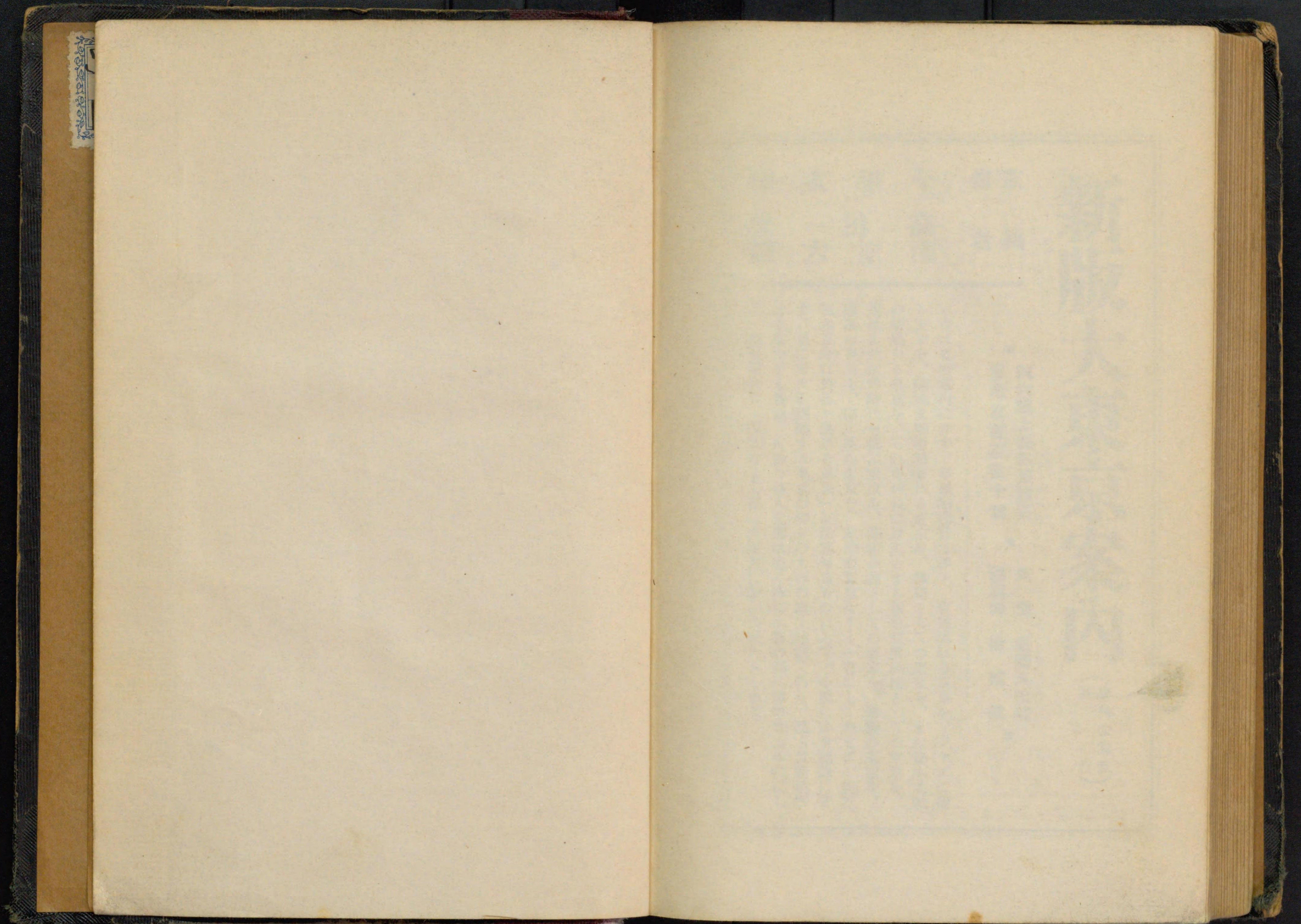
（中央公論社）
發行

監 修
編 者

今 高 淺
和 田 原
次 六
郎 保 朗

四六版上製五百餘頁
定價 壹圓五拾錢
參考寫真百數十葉
郵送料 拾貳錢

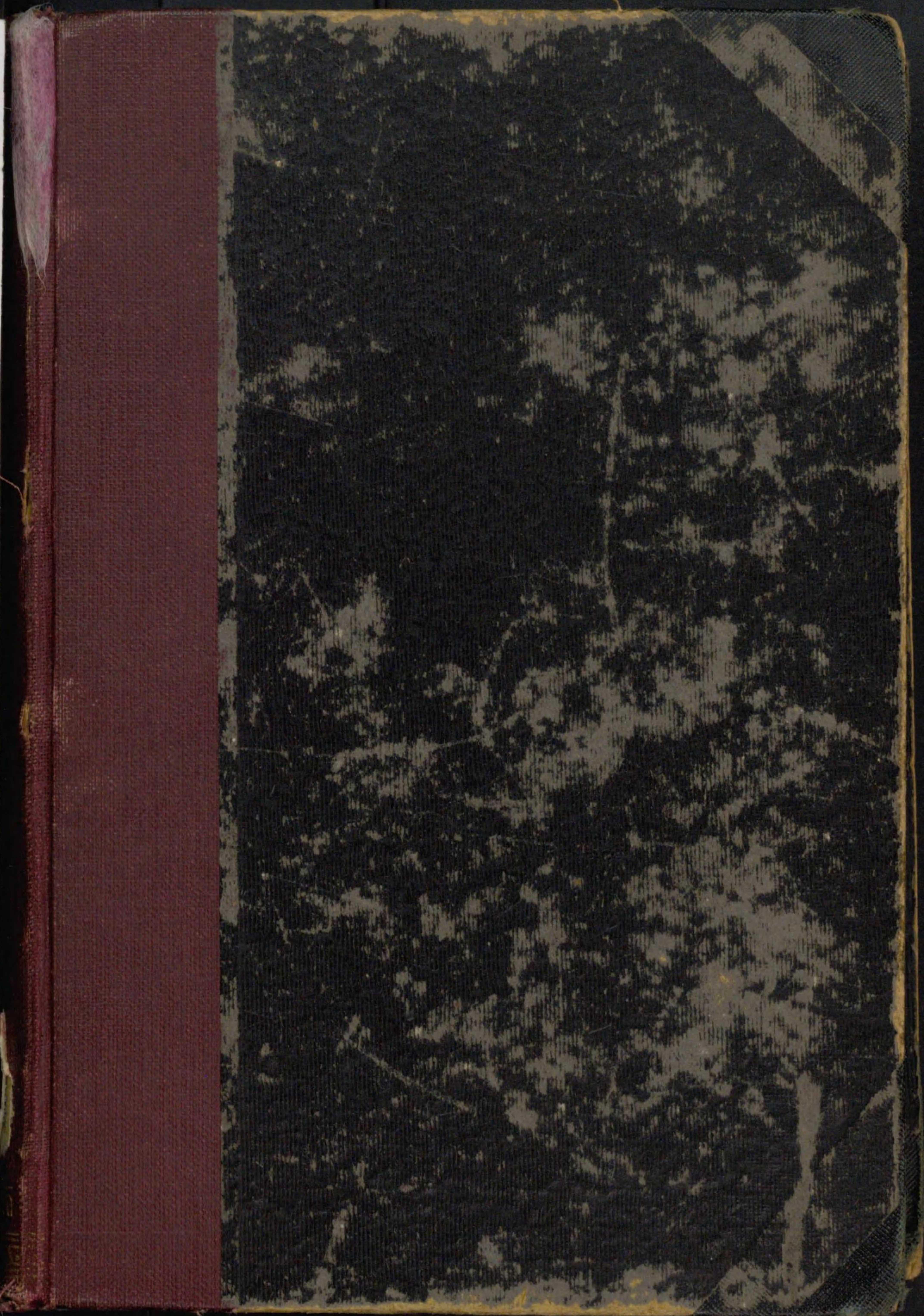
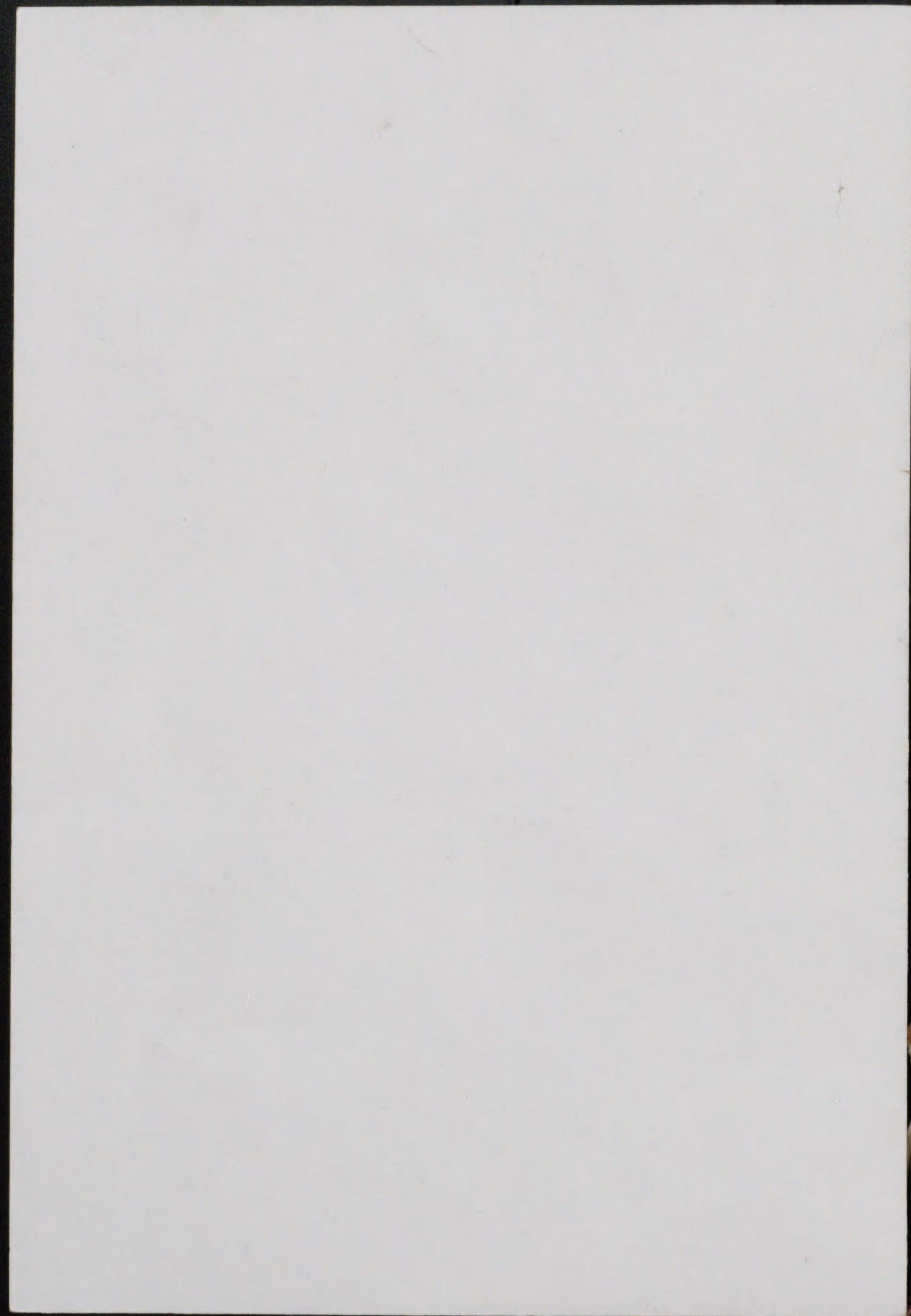
本書は名所案内に非ず、年鑑的統計に非ず、復興成れる東京を、ジャズに踊る東京を、機械文明の精華たる東京を、學府としての東京を、また資本主義の結晶たる東京を、それを弾ねのけんとする新思想策源地としての東京を、或はまた江戸時代を偲ぶ東京を、藝術の都としての東京を、智慧の東京を、罪惡の東京を、商工業の東京を、政治の東京を——一言にして盡せば、現在昭和五年に於る「生ける東京」を活寫せるものにして、小説に非ず記録に非ず、正に日々に躍動する東京の姿そのものの紙上建設であり、然も最新精密なる案内をも兼ね。百餘の挿入寫真は悉く特に本書の爲に撮影せるものにして、畫文相俟つて讀者をして宛ら大東京に遊ぶの感あらしめる。



Handwritten text on a small label in the top left corner of the left page, possibly indicating a page number or chapter reference.

5

596
157

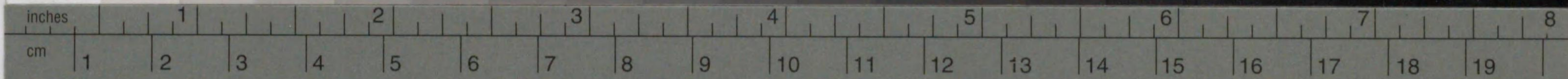


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

